第 22 章
豊後大野市の民俗芸能

豊後大野市には、人と自然が織りなして生み出された景観と、その景観を生むに至った人々の営みの中に生まれた伝統的な文化が存在します。この伝統文化は、地域の習俗・習慣・信仰と密接な関係を持つ民俗芸能（以下、芸能という）として人々に受け継がれ、豊後大野市を物語るうえで欠かせないものとなっています。

豊後大野市域は、江戸時代は岡藩と臼杵藩とにまたがっており、それぞれの藩に文化的な特徴があって、受け継がれてきた芸能にもその特徴が表れていました。

時代は進み明治維新、廃藩置県、町村制施行、さらには昭和、平成の町村合併を経たことで、芸能はさらに発展、拡散し当該地方を代表とする文化となりました。

当地で見られる芸能には神楽、獅子舞、白熊、棒術、千盆搗（せんぼんづき）、盆踊りなどがあり、国、県、市の文化財指定を受けた団体も多く存在しています。

神楽（かぐら）



御嶽神楽【2024 年撮影】

浅草流、御嶽流、深山（ふかやま）流、三輪（みわ）流と４つの流派に分かれ伝承されています。特に浅草、御嶽、深山の３流派は「大野系岩戸神楽」と総称され、この豊後大野発祥の神楽として県下に最も多く伝播する芸能として人気を博しています。大野系岩戸神楽は、着面し絢爛豪華な衣装をまとい荒々しく舞うのが特徴で県内他地域にも伝播する当地を代表する文化です。

また、三輪流は、臼杵発祥の採り物（とりもの）神楽で、江戸時代、臼杵藩に属していた三重町に多く分布する神楽です。市内には向野地区、上田原地区に伝わっており、上田原地区では湯立（ゆたて）神楽を行うことで知られています。



上田原湯立神楽【2009 年撮影】

獅子舞（ししまい）



泉獅子舞【2009 年撮影】

市内全域で、御嶽流、大行事八幡（だいぎょうじはちまん）流（今山流・緒方流）、西山古神（にしやまこしん）流、深山流、奥嶽流などの流派に分かれて伝承されています。

当地の獅子舞は、２頭又は４頭の獅子を立て、２人又は３人の舞子が演じ、笛・鉦・太鼓の奏でる調子で荒々しく舞うことで、その場所の魔を払い、清める意味を持っており、神輿巡行の露払いを担う芸能となっています。これも豊後大野発祥の民俗芸能とされ、県内では竹田市などに伝わっています。

白熊（はぐま）



石原白熊（いしばる）【2009 年撮影】

獅子舞と同様、当地方独特の芸能で、毛槍を担いだ練り子と調子を取る歌い手とで構成され、一般的には大名行列を模したことから発祥した芸能といわれています。

その分布範囲は、豊後大野市とその周辺に限定され、神楽・獅子舞より強い地域性を持った芸能ですが、大人数を要す芸能であることから各団体とも継承が立ちゆかなくなっている現状です。

棒術（ぼうじゅつ）



細口棒術【2009 年撮影】

明治維新の混乱期に武士階級より伝授された武術が芸能化したとされ竹内流、鞍馬（くらま）流、岡藩直伝などがあります。いずれも実戦的な所作を強く残す豊後大野特有の芸能とみられ、市内でも特定の地域にしか伝承されていない希少な芸能です。

これらの芸能の他にも、堤普請（つつみぶしん）や井路普請（いろぶしん）の際に仕事の効率を上げるために歌った唄や踊りが芸能化した「千盆揚（せんぼんづき）」や、かつては地域行事として盛んに行われていた「盆踊（ぼんおど）り」といった芸能があります。

現在では、ごく限られた地域に伝わるもので継承活動は厳しい状況ですが盆踊りの唄や千盆揚の様子は音源や映像記録として保存されています。

以上が、豊後大野市に伝えられている芸能の概要です。

これらの芸能は、今も各地の神社で春や秋に行われる祭典、各種イベントで披露されており、里に響き渡るお囃子は当地の風物詩となっています。

また、緒方町の「緒方三社川越（さんしゃかわごし）祭り」や千歳町の「柴山八幡社ひょうたん祭り」などは、神輿の川渡りや巨大なワラジを履いた「ひょうたん様」の登場といった他では見られない特徴もあって、市内外によく知られ、多くの人が見学に訪れます。

しかし、近年進む少子高齢化は、いずれの芸能、祭りの維持存続に影響し、後世へと受け継いでいくことは年々厳しい状況となりつつあります。

市では、映像化など可能な限りの保存措置を講じてきましたが、継承する「人」の減少に抗うことは難しく、市制施行から 20 年の間に保持できなくなった芸能もあります。

ただし、これらの芸能を継承することを理由として地域に残る若者が存在することもあり、引き続き守り、伝えていくことが必要です。

豊後大野市神楽会館では、これらの芸能を有料で公開することで、継承活動の後押しをしており、今後とも地道で粘り強い支援を継続させていきます。